

山から里の方へ遊びにいった猿が
一本の赤い蠟燭を拾いました。赤い蠟
燭は沢山あるものではありません。そ
れで猿は赤い蠟燭を花火だと思い込
んでしまいました。

猿は拾った赤い蠟燭を大事に山へ
持って帰りました。

山では大へんな騒になりました。何
しろ花火などというものは、鹿にし
ても猪にしても兎にしても、亀にし
ても、鼬にしても、狸にしても、狐
にしても、まだ一度も見たことがあ
りません。その花火を猿が拾って来
たというのであります。

「ほう、すばらしい」

「これは、すてきなものだ」

鹿や猪や兎や亀や鼯や狸や狐が押
合いへしあいして赤い蠟燭を覗きま
した。すると猿が、

「危い危い。そんなに近よってはい
けない。爆発するから」といいました。

みんなは驚いて後退しました。

そこで猿は花火というものが、どん
なに大きな音をして飛出するか、そして
どんなに美しく空にひろがるか、みん
なに話して聞かせました。そんなに美
しいものなら見たいものだと思ん
なは思いました。

「それなら、今晚山の頂上に行って
あそこで打上げて見よう」と猿がいい
ました。みんなは大へん喜びました。
夜の空に星をふりまくようにばあつ
とひろがる花火を眼に浮べてみんな
はうっとりしました。

さて夜になりました。みんなは胸を
おどらせて山の頂上にやって行きま
した。猿はもう赤い蠟燭を木の枝にく
くりつけてみんなの来るのを待って
いました。

いよいよこれから花火を打上げる
ことになりました。しかし困ったこと
が出来ました。と申しますのは、誰も

花火に火をつけようとしなかったからです。みんな花火を見ることは好きでしたが火をつけに行くことは、好きでなかったのです。

これでは花火はあがりません。そこでくじをひいて、火をつけに行くものを決めることになりました。第一にあたったものは亀でありました。

亀は元気を出して花火の方へやって行きました。だがうまく火をつけることが出来たでしょうか。いえ、いえ。亀は花火のそばまで来ると首が自然に引込んでしまっ出て来なかったのでありました。

そこでくじ「#「くじ」に傍点」が
またひかれて、こんどは鼬が行くこと
になりました。鼬は亀よりは幾分まし
でした。というのは首を引込めてしま
わなかったからです。しかし鼬
はひどい近眼でありました。だから蠟
燭のまわりをきよろきよろとうろつ
いているばかりでありました。

遂々猪が飛出しました。猪は全く勇
しい獣でした。猪はほんとうにやって
いって火をつけてしまいました。

みんなはびっくりして草むらに飛
込み耳を固くふさぎました。耳ばかり
でなく眼もふさいでしまいました。

しかし蠟燭はぽんともいわずに静かに燃えているばかりでした。